



中舞鶴の歴史・くらし探検隊 活動ニュース

第7号

発行 平成28年2月15日

編集 中央公民館

舞鶴市字余部下1167

海軍工廠、中舞鶴の人流・物流拠点 国鉄中舞鶴線・中舞鶴駅を探検

10両編成、乗降客は一日5千人



SL広場や中総合会館は旧中舞鶴駅構内の一部。駅と北側の道路の境界には水路があったとのこと(28年1月17日)

「中舞鶴の歴史・くらし探検隊」の第6回「探検」として、1月17日、中舞鶴駅や中舞鶴線の跡を探索しました。案内役は、昭和20年6月から昭和30年8月まで、東門(北吸)駅や中舞鶴駅に勤務された田丸昭恒さん(余部下在住)。中央公民館内で中舞鶴線の概略についてお話を伺った後、中舞鶴線跡や中舞鶴駅構内跡などを案内していただきました。概要を報告します。(次頁に続く)

中舞鶴線の概要

東舞鶴駅(新舞鶴駅)

～中舞鶴駅間 3.4キロ

東舞鶴～(1.6キロ)～北吸(東門)

～(1.8キロ)～中舞鶴

側線は、①軍需部倉庫(現・赤れんがパーク)へ、②造船所(海軍工廠)へ

■沿革

大正8年(1989)7月21日

一般営業開始(営業キロ3.4km、所要時間10分)

昭和14年(1939)6月1日

新舞鶴駅が東舞鶴駅と改称

昭和21年(1946)9月1日

東門駅が北吸駅と改称

昭和28年(1953)9月23日

台風13号で崖崩れ等が発生、長期間運転休止となる

昭和31年(1956)

旅客列車が気動車(ディーゼル)化
貨物列車はSLがけん引

<駅無人化>

北吸駅 昭和31年(1956)4月7日

中舞鶴駅 昭和38年(1963)2月1日

昭和47年(1972)11月1日

中舞鶴線廃止(営業係数934)

中舞鶴、池内探検隊の報告会 「まち探検って面白い」

舞鶴市の公民館では、中舞鶴地区と池内地区でふるさとの歴史や暮らしを再発見する「探検隊」事業を実施中。探検隊が見つけた地域の宝物や、探検の楽しさを報告。探検活動をまちづくりにつなげるための講演もあります。お気軽にどうぞ。

28年2月28日(日)午後2時～4時、中央公民館

【活動報告】中舞鶴の歴史・くらし探検隊
ふるさと池内探検隊

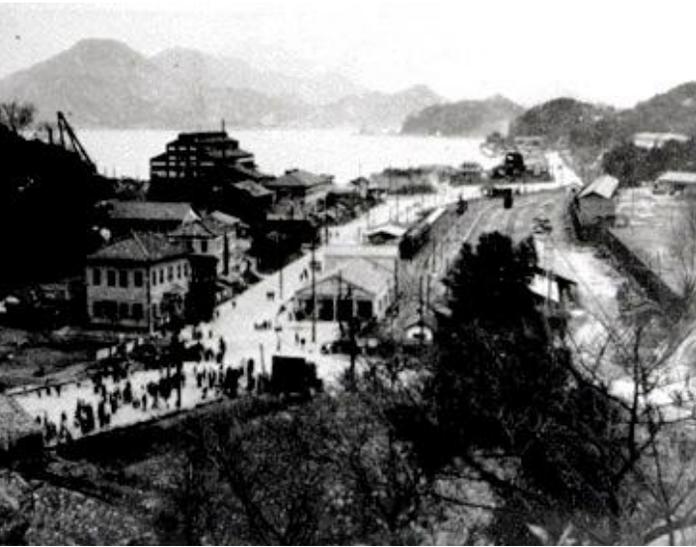
【助言・ミニ講演】

直田春夫(舞鶴市文化振興基本指針推進懇話会副会長)
相川康子氏(兵庫県立大環境人間学部非常勤講師)

【対象】まち探検や地域づくりに興味のある方なら誰でも。

入場無料、申込不要

中舞鶴線あれこれ



中舞鶴駅全景(昭和22年)。「不滅の汽笛」より。構内は7番線(案内板には8番線)田丸さんが勤務していたころは7番線であった



公園のSLは宮津線のお別れ列車

SL広場に展示されているC58形は宮津線(西舞鶴～豊岡84キロ)を走っていた最後のSL(昭和45年)。中舞鶴線のSLはC12形(C11形の場合も)。

この広場にC58を展示する際には、C12がC58を押し形で、脱線しないよう慎重に移動させたとのこと。



中舞鶴駅の構内跡(写真左側)は道路(国道と歩道)より一段高くなっている。現在の高さの違いも、当時の名残り。



▲総監部入口付近には場内信号機があり、そこから西側(内側)が中舞鶴駅構内となる



▲造船所への引込線が分かれていた付近。国道を挟んで踏切があった

元中舞鶴駅跡を紹介する案内板。設置したとのこと。



こんな汽車が走る

C12形蒸気機関車

鉄道省が製造した過熱式のタンク式蒸気機関車。小型で軽量なため、比較的短距離の閑散線区、あるいは入換用として長く使用された。写真左の「C12 32」は1933年製。

中舞鶴線北吸トンネル付近
昭和46年 福岡芳宏氏撮影

- ・客車は10両編成、それが3編成あり、東舞鶴～中舞鶴をピストン輸送。客車と貨車の混合編成もあった。
- ・上りは蒸気機関車が後ろ向きで客車を牽引するので、暖房用の蒸気ホースを客車につなぐことができず、客車は寒かった。
- ・客車にディーゼルカーが使われ出したのは昭和31年から

中舞鶴線 最後の列車
(ディーゼルカー)昭和47年
10月
「写真でたどるふるさとの歩み」
(平成8年3月、舞鶴市)より



中舞鶴駅

探検の感想と中舞鶴線の思い出

中舞鶴駅（昭和30年代）＝写
真右側の建物
「写真でたどるふるさとの歩み」平成
8年3月、舞鶴市より



- ・昭和30年の駅員は19名。戦中には最大45、6人が勤務していたという。
- ・全国の切符を販売。よく出る切符は印刷したもの、それ以外は手書き。行き先が東北地方のものも多かったとのこと。
- ・鉄道弘済会の売店（キオスク）もあった。当時はあこがれの美人が勤務（田丸さん）
- ・手荷物・小荷物の取り扱いも。小荷物の配達業務は現在の日通の仕事。小口貨物の窓口があり積込作業も日通が担った。
- ・職員の食事は弁当が多かったが、坂根食堂を利用することもあった。



中舞鶴駅入口は現在の中舞鶴交差点付近にあった。工場・造船所への通勤用に朝晩、仮の乗降口（改札口）が駅北側に設けられていたという

- ・鉄道だけではなく、当時の道路がどうなっていたか知りたくなった
- ・造船所の引込線や人がたくさん降りてきた光景、父に連れられ荷物を送った当時の記憶がよみがえってきた。
- ・和田地区に住んでいるが、中舞鶴線を利用していた記憶がない。
- ・正確な地図と比べるともっと面白くなるのではないと思う。引込線跡など、まだ残っているものがないか調べてみたい。
- ・榎川や余部下を流れていた川等、川の話ももっと詳しく知りたい。総監部敷地と自転車歩行者道の高さが違うことも、新たな発見となった。
- ・中舞鶴線全体のことも知りたくなった。
- ・東門駅付近の地形変化があったかどうか知りたい。榎川の下流が総監部横に来ていることを確認。
- ・子供のころから疑問に思っていた汽車の連結器の仕組みが、今日の説明で理解できた。
- ・祖父が造船所に勤めていた。その頃の様子を想像することができた。
- ・場内信号機などのハード設備の位置や、キオスクに勤めていた人の話などのソフトを知ることができた。
- ・S Lの煙やトイレなど、困ったことも思い出したが、汽車が大好きでよく乗っていた。DとCの違い、連結器の仕組みなど知った。国道の幅が広がった理由がわからないまま。

中舞鶴線の思い出

探検隊員 鈴木 隆

私は、4歳まで余部上で育った。中舞鶴幼稚園の年少組で万博が始まる3年前の昭和42年のことである。

中舞鶴での思い出は、そのすべてが4歳児の子どもの目線であり、断片的な記憶ばかりであるが、それらの記憶は、なんでもない日常の小さな、しかし、懐かしい記憶ばかりである。

さて、中舞鶴線と聞いてすぐに思い出すのは、黒い蒸気機関車やツートンカラーの気動車のことではなく、夕暮れ時を過ぎて、白熱電球がぼんやりとオレンジがかった灯りを灯す無人の駅の改札口や暗いプラットフォームの風景である。

東舞鶴に住む親戚の家に往く時なのか、あるいは母の実家のある町まで里帰りする時なのか、季節さえもはっきりしないが、改札口の木の柵は、自分の背丈より、はるかに高かったことを覚えている。プラットフォームに通じるコンクリートの坂をゆっくり

歩いた。ホームには、まだ汽車はいなかった。ホームにまばらに立つ柱に取り付けられた白熱電球がホームと線路を薄暗く照らしていた。そこには、オレンジ色と黒い闇の世界が静かに広がるばかりであった。他に汽車を待つ人はなかった。

弟も一緒だったはずであるが、不思議と母の顔も弟のことも思い出せない。そんなホームで、私は、汽車が到着するのを待っていたのであるが、なぜか暗闇への不安や恐れを感じることはなかった。むしろ、そのオレンジ色に包まれた世界に心地よい安らぎのようなものを感じていたように思う。

今はもう存在しない中舞鶴線。とりわけ、私の中舞鶴駅の思い出は、その時の風景がすべてと言ってよい。中舞鶴線という言葉を知ったときに、オレンジ色の世界が脳裏に浮かぶ。少し気恥ずかしく、書きづらいことなのだが、私は、いつかまたあの時代に帰って、駅のホームに立つ日が来ることを密かに確信している。

シリーズ 祠と地藏様

第1回 身近な仏さま

中舞鶴には、祠や地藏さまがたくさんあります。調べてみると余部上地区だけでも20の祠がありました。素晴らしいことは、町の人々によって、途絶えることなく、綺麗に手入れされ、新しい花が添えられて大切に受け継がれていることです。地域の宝ともいえる「祠と地藏さま」についてできるだけ、いろいろな角度から調べて紹介したいと思います。

地藏菩薩は、中国や日本では冥土の守護尊として広まったとされています。このため死後の六つの世界「六道」(地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人道、天道)を旅する僧の姿をとり、六道にいる人々の願いを叶える存在となります。お墓の入口には、六体の石の地藏菩薩(六地藏)がよく祀られています。

地藏さまは、頭を剃った坊さんの姿をしているのが特徴で、右手に錫杖を、左手にはあらゆる願いを叶える如意宝珠を持っておられます。道端やお墓の入口などに祀られていることが多く、身近な仏様に感じられます。子どもの守護神として、小僧姿のものや、赤いよだれかけや頭巾を着けられているものも多く見られます。



八十八か所のお地藏さま
(共楽公園)

一部では、化粧をした化粧地藏も。人々の身代わりになって苦しみを受ける菩薩(身代わり地藏)、目病み地藏や塩かけ地藏など、ケガや病気を治してくれる仏さまもあります。

中舞鶴の昔ばなし その① 龍珠

話しは平安時代のこと。春屋妙葩(しゅんおくみょうは) (普明国師)という高僧が京の都の南禅寺から余部の里にあった鎮海軒という庵へやって来られて、そこに雲門寺という寺をお造りになった。国師はどんなに貧しい人の話でも丁寧に耳を傾けられる方であつたので、近隣からおりに訪れる人々が絶えることはなかった。

そんなある日のこと、地元の人々が国師のもとにやって来て次のような話をした。

村の近くにこんもりとした昼でも通るのに薄気味悪い森がある。その森の中に菖蒲が池という池があり、夜になると大蛇が出てきて、村人を驚かそうとする。びっくりした村人は腰を抜かしたり、逃げようとしてうっかり転んで大怪我をした者もいる始末。そこで何とか国師の御徳で大蛇の悩みを取り除いていただきたいとのことであつた。

国師はさっそく菖蒲が池のほとりに行って毎日祈禱を繰り返した。祈禱の間、池の方で何かざわざわするのを感じられたが、大蛇の姿を見ることはなかった。

それから数日後、国師が朝早くからお堂で読経をしていると、何やら人の気配がした。国師はなおも読経を続けると、国師のそばに黒髪の美しい女が音もなく現れた。「そもさん(だれか)」と国師が問うと、美しい女は、鈴を鳴らすような清らかな声で、「私は菖蒲が池に住む大蛇です。私の願いを聞いてもらおうと村人に話しかけるのですが、みんな逃げてしまいます。ある時などは大鎌で私を殺そうとすることさえありました。それが国師の功德のおかげで、念願かなって昇天の化(げ)を得ることが出来ました。永らくこの池に住まわせていただいたお礼に、宝物の水珠を置かせていただきたいと存じます。」と言うが早いか、その女は、龍に姿を変えて天へ昇っていった。

この時の水珠が雲門寺の寺宝として今も大切にされているということです。

今回は、この大蛇にまつわるもう一つのお話を紹介します。(鈴木 隆)

共楽公園を中心に中舞鶴に咲く草花を連載します。

例年がない暖冬とは言うものの、なかなかどうして、1月の寒さは、たいへん厳しいものがありました。1月最後の日曜日、暖かな陽気に誘われて共楽公園に出かけてみましたが、まだ花を見つけられません。そこで、共楽公園から余部上に通じる坂道を下り、雲門寺の境内へ。ありました、まだ咲ききつてはいない小さな椿(ツバキ)の花。ツバキは、1月中旬から4月下旬にかけて咲く、冬の代名的な花。色彩に乏しい季節を彩ってくれる貴重な存在です。

共楽公園 花便り NO. 1

雲門寺の
椿
(ツバキ)

